

三

しかしこゝで問題となるのは、第十二號墓の鎮子と局板とはいつしよにいで、骨箸、骨棊、骨籌、骨線とは別にかたまつていつしよにでたといふことである。第十七號墓でも、とにかく方形の石製局盤のほか骨線があつて、別種の局盤が存在することをものがたつ

ドルメンに關する最古の記録

有名な董仲舒の弟子に陸弘といふものがあつた。彼は昭帝に對して、公羊の災異應驗説と革命説とを結び付け、その禪讓を建白したため、時の權力者たる霍光により、この上奏文を取次いだ宦官と共に誅されてしまつた。『漢書』七十五卷の同傳にはその經過が記されてゐるが、そのそもその初めは左のやうな事件からである。

孝昭元鳳三年正月。泰山萊蕪山南。匈匈有數千人聲。民視之。有大石自立。高丈五尺。大四十八圍。入地深八尺。三石爲足。石立後有白鳥數千。下集其旁。云々。

てをる。このばあひ、どちらを博具とし、どちらを他の局戲とするかといふことはかに決定できない。博箸、博棊、博鎮、博局の解は、要するにわたくしの想像である。けれども不可能な想像ではない。もつとも可能な想像である。わたくしは發掘に即し、遺物に即して、かうかんがへざるをえないといふところをしめし、あとは大方博雅の叱正をまちたいとおもふ。

萊蕪山といふのは泰山中の一峰であらう。山のことであつてみれば、大きな岩石がそのむかし崩れ落ちてこゝした記述のもとになるやうな場合もないのではない。然し讀み直して見ると、どうもドルメンの存在を地方の農民等が発見し注意したものではなからうか、といふやうに解せられる。山東省の何處かで鳥居博士がドルメンを確認したといふ新聞記事を何時だつたか見た。今を去る二千年の昔、すでに人々が神秘的な存在として巨石建造物をながめたとすれば、あの石斧に對する彼等の解釋などと共に深い興味を催さざるを得なう。

〔小野生〕